

「ピエロ」美しく滑らかに



おもしろう
てやがて悲し
きピエロか
な。名曲の誉
れ高けれど、
なかなか実演

ではお目にかかれぬシェーンベルク
の「月に憑かれたピエロ」を聴
き、ふとこんな戯れ言が浮かぶ。
ソプラノの中嶋彰子、指揮のニル
ス・ムース、それにいずみシンフ
オニエッタ大阪のメンバーによる
秀演だった。大阪のいずみホール
の超豪華企画、「ウィーン音楽祭
in OSAKA 2009」
の一夜のことだ。

演奏会最初の演目は今年が生誕
百年の貴志康一の歌曲「さくらさ
くら」「赤いかんざし」「かもめ」。
いづれもドイツで発表された、言

わば輸出用日本製品だ。そして、
まさにそれに適った中嶋の劇的な
歌唱のおかげもあり、面白く聴く。
続いては、貴志の百年前に生ま
れたメンデルスゾーンの歌曲3
曲。うち「子守歌」「嘲り」の2
曲は新発見曲の日本初演だ。これ



卓越した表現力で聴衆を魅了した中嶋彰子(右)

らは当日に追加さ
れた演目で、まさ
にうれしい驚き。
なお、ここまでの
ピアノはムース。
指揮者ならではの
巧みなサポートで
あった。

前半の締めくく
りはシェーンベル
クの弦楽六重曲
「浄夜」。演奏は

濃密なロマンの表現とそれを支え
る緻密な構成を巧みに両立させた
見事なもので、聴くほどに音楽の
ドラマに引き込まれ、改めて作曲
者の偉大さが実感される。

さて、後半は肝心の「ピエロ」
だ。この曲では言葉は歌われるよ
りも、むしろ語られるべきもので
あり、どきつい器楽アンサンブル



と相まって、猟奇的なサウンドが
発せられる……はずなのだが、今
回の演奏にはそうした陰は微塵も
ない。中嶋の語りは滑らかな歌へ
と傾きがちだったし、アンサンブ
ルはニルスの下で実に整然と音楽
を奏でる。

しかし、これはこれで面白い。
この曲の生々しい表現の炸裂は、
作曲後1世紀を経て、浄められて
しまったかのようだ。そして、音
楽はあたかも夢の中の出来事のよ
うに響く。だが、それはたんに美
しいだけではない。何もかもが不
透明なこの現在の不気味さ、寄る
辺なさを自ずと体現しているよう
に私には感じられた。

大久保賢(音楽評論家)
——10月20日、いずみホール。